《研究報告》

コスモロジーと自覚の立場
――中村雄二郎の「共通感覚」の哲学とアジアへと開く日本文化への可能性

松　井　信　之*

A Standpoint of Cosmology and Self-awareness:
Nakamura Yujiro's Philosophy of "Common Sense" and Possibility of Opening Japanese Culture to Asia

Nobuyuki MATSUI

This research report focuses on the philosophy of Nakamura Yujiro, who is one of the prominent philosophers in post-war Japan. His philosophy based on the theory of "common sense" evolved into his broader thinking of the cosmological perspective of the "pan-rhythm" theory and the "oscillation" of the universe. In this report, I will show his unique contribution in the Japanese history of political thought, which consists of the dichotomy between thought for autonomy and for "common sense." In addition, the post-war history of thought in Japan has been confronted with two questions. One is the problem of how to overcome the closed vernacularity of Japanese culture, and the other is the problem of how to recalibrate the European way of knowledge based on rationality. The thought for autonomy is said to have an affinity with the problem of the former, and the thought for "common sense" is closely linked with the latter problem. The hypothesis of my study is that Nakamura's philosophy based on the "common sense" theory suggests the possibility of overcoming both problems comprehensively, because of his viewpoint of the *cosmological self-awareness* as this report conceptualizes, which is introduced through his focus on the transgressive relationships between Japanese culture and Asian cultures.

キーワード：共通感覚、自律、コスモロジー、悪、アジア
Keywords: common sense, autonomy, cosmology, evil, Asia

* 立命館大学立命館アジア・日本研究機構客員研究員
matsuinobyy1988@gmail.com

© 立命館大学アジア・日本研究所
『立命館アジア・日本研究学術年報』2020, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.1, pp.48-52.

I. 問題の所在――「自律」と「常識」をめぐる日本思想史のなかの中村雄二郎の哲学

日本社会では、一方で、かねてから、哲学・思想と政治思想の各領域において、西欧的な知の枠組をいかに組み換えればよいかという問題と、いかに日本の土着的な世界観を乗り越えるかという問題が並存しており、他方で、知識人たちが哲学と政治思想の間を横断するかたちで言論空間を形づくってきた帰結として、それらの問題が輻輳して混在してきた。たとえば、政治思想史家の小幡清剛（2017）は、この問題構造を丸山眞男と清水幾太郎を象徴とするかたちで、以下のように対置する。

> 過度の単純化を恐れずに言えば、丸山＝福沢が強く希求する「想像力」は、歴史・伝統を批判する「近代的思惟」が有する散文的・未来志向的な「想像力」――それは「人間的自然」が陥る「古習の惑溺」により抑圧されていた――であり、他方、清水＝ヴィーコが復興を試みる「想像力」は、歴史・神話を尊重する「共通感覚（常識）」に基づく詩的・過去志向的な「想像力」――それは「主体的作為」の前提となる「近代的思惟」により抑圧されていた――なのである。（小幡，2017：58 頁）

小幡の図式化によれば、日本におけるリベラリズム的な思考は、前者の「丸山＝福沢」路線に代表され、“いかにして日本の土着的な世界観を乗り越えるか”という問題意識に取り組もうとするのに対して、後者の「共通感覚（常識）」に依拠する清水＝ヴィーコでは、文化的コンテクストに埋め込まれた知のあり方を近代的精神としての合理的思考に対置する点で、“西欧的な知の枠組をいかに組み換えればよいか”という問題意識に取り組むものであり、「主体」は共同体的・日常的な文脈から完全に自由な存在ではなく、むしろ「庶民」として常識的な判断力を持つとされる（清水, 1972：53 頁；小幡，2017：53 頁）。簡潔に言えば、自律と常識に基づく対立軸が形成されている、ということである。

くわえて、以上の問題は、加藤典洋が『敗戦後論』で提起した問題に見られるように、戦争責任として自国の戦死者に向き合うべきか、アジア諸国の死者たちに向き合うべきかという問題とも結びついていると考えることができる（加藤，1997；高橋，1997）。ともあれ、ここで大きな問題となることは、後者の「共通感覚（常識）」の系譜を重視すると「常識」を共有しない他者への暴力の問題が生じると同時に（小幡，2017：40–41 頁）、その暴力の問題を回避するために「共通感覚」の系譜を捨て去ると「西欧的な知の組み換え」という問題にアプローチすることができなくなるというアポリアが生じることである。したがって、戦後日本の思想空間が残した問題というのは、いかに「西欧的な知の組み換え」を志向しつつ、「日本文化の土着性を乗り越えるか」というものであったと言えよう。この輻輳する問題に自覚的に取り組んだ者の一人が本研究において焦点化する中村雄二郎であった。彼の哲学は、西田哲学の批判的継承やレヴィ＝ストロース、ミシェル・フーコー、あるいはドゥルーズなどに依拠する点で、「西欧的な知の組み換え」を志向する哲学者であるように見える。しかし、『正念場』において中村が述べているところでは、彼の哲学は、中江兆民の『一年有半』における「わが日本、古（いにしえ）より今にいたるまで哲学なし[1]」（中江，1970：378 頁）という言葉と向

[1] これに続けて中江が激しく批判するところでは、「浮かれきった軽薄の大病根も、まさしくここにある。志が薄く

き合うなかで、日本社会の活動領域全般に広がる哲学の不在、「ムードに弱く軽はずみであること」、「意志が弱く実行力に欠けている」という精神的風土に対する批判であると言える（中村，2000a：182–184 頁）。

以上に基づいて着目すべきは、彼の行った「共通感覚」の哲学であり、またそれと結びつく「共通感覚」の制度的表現としてのインドネシア・バリ島の「魔女ランダ」に関する人類学的哲学であり、またそれと密接に結びつく文化に内在する「善／悪」の観念についての分析である。さらに、これらの考察を通してみるとき、先に見た日本思想史が抱える問題の輻輳する状況のもとで浮かび上がるのは、日本思想史におけるいわばコスモロジカルな思想の重要性である。

II. 共通感覚と悪の問題

中村の言う「共通感覚」は、多義的かつ多層的な意味を内包している。第一に、それは、日常的に「健全な」判断力を支える良識に近い意味を持つが、第二に、アリストテレスによって論じられた文脈でいえば、「諸感覚を統合し秩序立てるもの」である（中村，2000b：37 頁）。第三に、それは諸感覚を結びつけるだけでなく、感覚と理性を結びつける「想像力の座」である（中村，2000b：212–213 頁）。確かに、中村の「共通感覚」の議論は、過去の出来事を想起し、語るという「記憶」という「行為」を重視する点で、共同体の過去を擁護する議論であるように見える（中村，2000b：225–226 頁）。しかし、中村の議論は、文化的伝統に埋め込まれた「共通感覚」の重要性を強調しているというよりも、第二の身体的感覚としての「共通感覚」の働きから第三の「想像力の座」としての「共通感覚」を捉え返すことで、「自由」と「共感」を統合する役割をもつものとして理解しているように解釈できる。それは「表現」することと切り離すことができない想像性＝創造性の座であり、かつ、他者の「痛み」を理解する共感能力の座でもある。

次に、「共通感覚」と「魔女ランダ」との結びつきについてであるが、簡潔にいえば、両主題は、「パトスの知」において結びつく。「パトスの知」とは、「操作の知」としての科学的思考に対して、「環境や世界がわれわれに示すものを（…）読みとり、意味づける」知である（中村，2001：84 頁）。このとき、「すべての物事の徴候、徴し、表現」が「共通感覚」によって察知され、それがシンボルやコスモロジーへと体現される（中村，2001：84–85 頁）。

最後に、以上の議論と文化に内在する「善／悪」の観念との密接な結びつきについてである。たとえば、「魔女ランダ」はバリ島の神話的世界観においては、ヒンドゥー文化におけるシヴァ神に対応する創造と破壊、生と死の二面性を有しており、それは対極的な善と悪の関係ではなく、円環をなす関係としてバリ島のコスモロジーに表現される（中村，2001：16 頁，33–34 頁，41–43 頁）。西欧的な理解からすれば、「悪」とは「存在の否定」であるが、中村がスピノザの議論に則して言うところでは、悪とはむしろ「関係の解体」である（中村，2000c：18 頁以下）。すなわち、スピノザは、精神と身体の表裏一体性の視点に基づいて、「精神と身体とに同時に関係する喜びの感情を快楽ある

行動力がない大病根も、まさしくここにある。自分でつくった哲学がなく、政治では主義なく、政党の争いでも継続性がないのは、原因は実はここにあるのだ。（…）きわめて常識に富んだ国民だ。常識をこえて何かを打ち出すことは、とうてい望むことができない」（中江，1970：379 頁、傍点筆者）。こうした極めて「丸山＝福沢」的な常識批判を展開する兆民に、むしろ「共通感覚」の側から中江の問題意識を継承する中村の視点に着目する必要があるだろう。

いは快活と呼び、これに反して同様な関係における悲しみの感情を苦痛あるいは憂鬱と呼ぶ」（スピノザ，1951:180–181 頁）と言ったが、この観点から、中村は、悪を「自然の一部としてのわれわれの活動力を減少させるとともに、われわれのうちに秩序立った関係を解体し破壊させるもの」と規定する（中村，2000c：19 頁）。だが、中村はここから一歩踏み出して、関係の解体がまた新たな関係の形成に結びつくことを強調する。これは、「悪」と「善」の容易な区別の困難さを示すだけでなく、「悪」がわれわれの生に身近なものであり、かつ「あるべからざる」ものとして密着しているという逆説的性質を示している（中村，2000c：21–22 頁）。また、このとき、「悪」の存在が自己とは離れたところにある――つまり、自己が「善」の側にいる――という認識が他者への暴力を招来すると言うことができるだろう。

さて、以上の中村の哲学を概観すると、確かに、小幡の図式化にあった「清水＝ヴィーコ」の側にその哲学を位置づけられそうである。しかし、共通感覚からシンボリズム、そして悪の問題を一続きのものとしてとらえると、それは自然を含めた他者とともに生きる世界のなかでいかに自覚的な判断を行いうるかという問題に結びつく点で、一筋縄では類型化しがたい特徴を内包している。ここで判断とは、端的には「許せることと許せないこととの限界をはっきり持つこと」という倫理的判断と密接に結びついているが、その判断基準を形成するためには、共通感覚＝想像力を中心として、人間関係や人間と自然との関係を理解する必要があることが指摘されている（中村，2000c：29 頁，31 頁）。

こうしたところから中村独自のコスモロジカルな哲学である「汎リズム論」や振動論を読み解いていく必要がある（中村，1991）[2]。つまり、彼のコスモロジーは、自他の融即へと向かうものではなく、他者への暴力や悪が人間存在と密接に関わり続けているという認識と、それに基づく判断力や意志の行使の問題へと向けられたものではないか、と仮説を立てることができるのである。この観点からすると、中村の哲学は、「日本の土着性からの脱却」や「西欧的な知の枠組の組み換え」という問題だけでは捉えられない射程を持っているように見えてくる。その哲学は、自律的判断を可能とするためのコスモロジーであり、かつ、自然を含む他者との関係に基づく知の構築を特徴とすると言える。

III. 今後の研究の展開
――コスモロジカルな自覚の立場からアジア文化へと日本文化を開く

以上の視点にもとづいて、本研究は、中村雄二郎のコスモロジカルな哲学の日本思想史における位置づけを系譜化し、さらに明確化する方向へと展開することを企図している。それに加えて、そのコスモロジーの内容がパリの文化だけでなく、より広くは、ヒンドゥー文化、また仏教文化を広く参照するなかで展開されていることも焦点化する必要がある（中村，1991：第 2 章）。いいかえれば、中村は、日本の近代化が引き起こした内的・外的な「悪」ないし暴力の問題を乗り越えうる自覚的判断力を構築するために、アジア文化との共鳴関係を強調していると理解することができるのではないか、ということである。これが本研究報告の副題にある「アジアへと開く日本文化への可

[2] 彼の「汎リズム論」とは、西田幾多郎の「場所」概念に量子的な無限の意味の振動を読み取り、振動が一定の振動数に安定化し、「リズム」を奏でるなかで事物として現象するということを自然界の根底に見出すコスモロジーである。

能性」が意味するところである。

これまでに、中村雄二郎の哲学に関して、その射程を明確化するためにいくつかの口頭発表を行ってきたが、コスモロジカルな自覚の立場の確立としての中村の哲学の思想史的な意義については未だに明確化することができていない。本研究報告では、大まかなマッピングのなかで、自律か共通感覚（常識）かという二分法に収まりきらない意義を持つ中村哲学という点のみを強調するにとどめている。今後の研究としては、さらにそうした射程がいかなる系譜のうえで可能となっているのか、というタテ軸での中村哲学の位置づけに加えて、同時代的なヨコ軸の論争のコンテクストにその思想を位置づけることで、コスモロジカルな自覚の立場という視点の今日的な意義を明確化したいと考えている。

参照文献

小幡清剛（2017）『丸山眞男と清水幾太郎：自然・作為・逆説の政治哲学』萌書房.
加藤典洋（1997）『敗戦後論』講談社.
清水幾太郎（1972）『倫理学ノート』岩波書店.
スピノザ（1951）『エチカ：倫理學 上，下』畠中尚志訳，岩波書店.
高橋哲哉（1997）「ネオナショナリズム批判のために」『現代思想』25（10），262–275 頁.
中江兆民（1970）「一年有半」河野健二編集『日本の名著 36 中江兆民』中央公論社.
中村雄二郎（1991）『かたちのオディッセイ：エイドス・モルフェー・リズム』岩波書店.
――――（2000a）「正念場」『中村雄二郎著作集 第二期 VI』岩波書店.
――――（2000b）『共通感覚論：知の組みかえのために』岩波書店.
――――（2000c）「悪の哲学ノート」『中村雄二郎著作集 第二期 III』岩波書店.
――――（2001）『魔女ランダ考：演劇的知とはなにか』岩波書店.